

「勧告生かさず」批判

福島事故 IAEA、報告で

せず、非常用ディーゼル発電機などの浸水対策を欠いていたとした。

原発で働く電力社員らは過酷事故に対する適切な訓練を受けておらず、津波による電源や冷却機能の喪失への備えも不足。原発事故と自然災害の同時発生に対応するための組織的な調整もなかったとした。

IAEAは提言として、世界各国の原発で設計時の想定を超える自然災害への対策や、

新たな知見に基づいた安全対策の強化を要請。第1原発で増え続ける汚染水の対策としては、浄化設備でも除去できないトリチウムを含む水の海洋放出を検討することを求めた。

【ウィーン共同＝宇田川謙】国際原子力機関（IAEA）が東京電力福島第1原発事故を総括し、加盟国に配布した最終報告書の全容が24日、判

明した。東電や日本政府の規制当局は大津波が第1原発を襲う危険を認識していたにもかかわらず実効的な対策を怠り、IAEAの勧告に基づいた安全評価も不十分だったと厳しく批判した。

技術報告書と共に提出される予定で、国際的な事故検証は大きな節目を迎える。事故の教訓を生かした提言も含まれており、今後、各国の原発安全対策に活用される。

再稼働へ向けた動きを進める電力各社に対し、安全対策の徹底を求める声も強まりそ

うだ。

報告書では、東電が原発事故の数年前、福島県沖でマグニチュード（M）8・3の地震が起きれば、第1原発を襲う津波の高さが最大約15メートルに及ぶと試算していたが、対策を怠ったと批判。原子力安全

後、9月の年次総会に詳細な

（6面に関連記事）

報告書は42カ国の専門家約180人が参加して作成。要約版約240ページが6月のIAEA定例理事会で審議された

保安院も迅速な対応を求め